平成２２年度山口市美術展覧会講評

大　賞

「オブジェー風景（公園）」

山根　秀信

フィルターを通したようなぼんやりした風景が、モノクロームに近い抑制された色彩で描かれている。遠い記憶の風景のようでもある。これまでいくつかの展覧会で受賞歴のある実力者だけに、表現力は群を抜いている。すでに確立された表現世界である。昨年のレジ袋を描いた作品も印象深かったが、本作では穏やかな春の公園が平明な風景のままに描かれているので、見る側も親しみをもって作品の中に入り込んでいくことができる。空気のゆらぎや光の暖かさも感じられる。この作者にとって本展覧会はもはや舞台が狭いだろうと思う。

（濱本聰）

◆　総評

数年続けて本展覧会の審査に携わっているが、年を追うごとに作品のレベルが上がっているようである。全体的には質的にまとまりのある出品内容だと思う。同時にまた、ベテランの堅実な作品の一方で、新しい人の初々しい作品も登場してきたりで、見ていて実に楽しい。なによりも創作を楽しんでいる姿勢が多くの作品から伝わってくることがうれしい。点数的に多いだけにさすがに絵画が充実して受賞作も多いが、ほかのジャンルももっとたくさんの出品で競い合うようになることを願う。

（審査委員長　濱本聰）

（審査員）

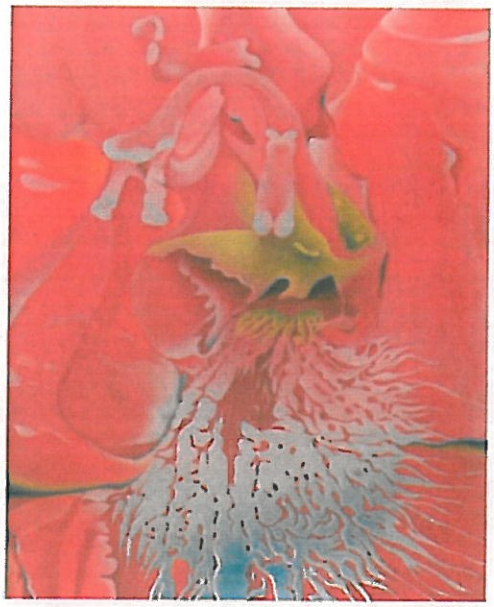
荒瀬長州　　梅光学院大学特任教授
徳留大輔　　山口県立萩美術館・浦上記念館学芸員
濱本　聰　　下関市立美術館館長
前田淳子　　山口県立美術館普及課長
松原　茂　　山口芸術短期大学教授

（五十音順・敬称略）

準大賞

「生命」

光永　透



タイトルを見るまでもなく、生のエネルギーがあふれているようです。咲き誇る蘭の花の花弁の中心部のようにも見えますし、誕生する力が満ち満ちた胎児のようにも見えてきます。静かに力をみなぎらせているピンク色の上半分に比べ、下半分は中心に向かってエネルギーが集約してくるように感じられます。全体に明るい色の印象が強いのですが、その色を引き立てているのが効果的に使われている青や緑の寒色。作品を見る私たちにパワーをくれそうな作品です。（前田淳子）

山口市教育委員会賞

「森の妖精」

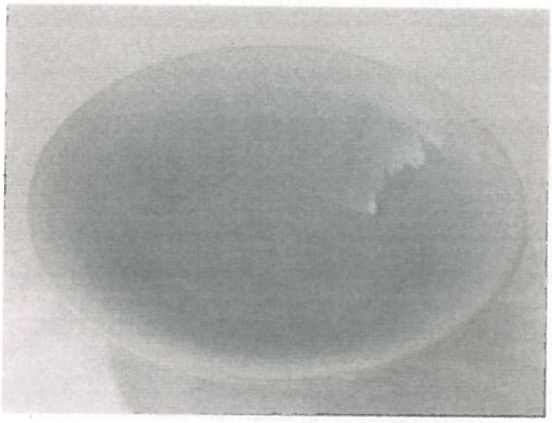
吉見　健太郎

夜の公園ほど寂しいものはないのかもしれません。昼間は賑わっていても夜はひっそりとしている。でも、もしかしたら夜の公園も私たちには見えないだけで、実は静かに賑わっているのかも。小さなかわいらしい滑り台で遊ぶのは、ちっちゃい子どもの妖精なのかしら。タイトルを知ってから作品を見ると、さらに想像は広がります。公園をつつみこむ夜の世界を淡い光であたたかく浮かび上がらせた、光と闇の使い方がとても魅力的な作品です。（前田淳子）

山口文化協会賞

「万緑」

西林　美奈子



大ぶりで、ゆったりとした鉢ですが、しっかりと形を立ち上げています。やや釉調にむらがあるのが気になりますが、器の内外面ともに淡青色をした釉薬を施し、その背景の白色との色調におけるグラデーションをうまくマッチさせています。このことが、単調になりがちな鉢という器形を、見ているものを飽きさせずに、また大きい作品にも関らず、すっきりとした、爽やかな雰囲気を感じさせてくれ、本作品の魅力となっています。（徳留大輔）

おごおり文化協会賞

「２１年目の春」

藤村　正子

作者が飼っていると思われる猫を方形のキャンバスに大胆な構図で描いている。時折見せるのであろう、飼い猫の愉快で愛くるしいポーズのなかに長年連れ添ってきた仲間への愛情やいたわりの心情が伝わってくる。抑制された色数ではあるが、パステルを効果的に使い複雑な質感を作り出している。とりわけ緻密に描かれている猫の表情はこの作品を引き締め、生命の躍動を感じる。（松原茂）

平成22年度山口市美術展覧会受賞者一覧

賞	部門	作品名（ふりがな）	作者氏名（ふりがな）
大　賞	洋画	オブジェー風景（公園）	山根　秀信
準大賞	洋画	生命	光永　透
山口市教育委員会賞	写真	森の妖精	吉見　健太郎
山口文化協会賞	工芸	万緑	西林　美奈子
おごおり文化協会賞	洋画	21年目の春	藤村　正子
奨励賞	日本画	大きな実り＆小さな実り	国重　英昭
〃	洋画	しあわせのとき	佐藤　文恵
〃	工芸	朝明け	原田　雅子
〃	書	獨坐敬亭山	今橋　恵子
〃	写真	秋映る	渡邉　サダ子
審査員特別賞	洋画	三位一体	木内　功
〃	洋画	PEKO	池田　愛
〃	彫刻	ぷりぷり　おん　べいりーふ	田中　絹子
〃	工芸	山口七夕ちょうちんまつり	吉松　平和